父親が「最後はこのザマか」

何件かをまとめての遺品の合同供養も行う

れなのに、1カ月もの間、父親の死に気がつかなかったという。実はこんなケースも少なくないんです」

吉田氏によれば、孤立死ばかりではなく、自殺や殺人現場に接することもあるという。

北陸のとある街に建つアパートの一室。住んでいたのは50代の女性だった。部屋に入ると、そこは一面が血だらけで、室内の壁には足蹴りでもしたのか、激しくへこんでいる。刃物で手首を切っての自殺だった。ひどく苦しんだのだろう、苦痛に耐えかねてみずから通報した電話には、くっきりと血の手形が残されていたという。

さらに凄惨な殺人現場もある。関東地方の10階建マンションの一室。依頼主は、亡くなった22歳の娘の父親で、死因は放火による焼死だった。現場に入ると、火事現場特有の刺激臭がまだ残っている。女性は家出同然の状態で家を飛び出したが、父親は2日前に警察から電話があり、娘の訃報を知ったという。寝ている間に同棲相手の男が灯油をまき、火をつけたのだった。

「さんざん心配かけやがって、最後はこのザマか・・・」

しぼり出すような父親の声が、今も吉田氏の耳には残っているという。

吉田氏は「孤独死」という表現ではなく、「孤立死」という言葉を使う。

「ここ数年、誰にも看取られずに死んでいく高齢者たちがクローズアップされていますが、実は孤立しながら生きてきた人たちというのは、昔からいたものです。ところが今は、若い世代にこの『孤立死』が広がっているんです。彼らは人と接することなく、パソコンやスマホに依存しながら生きています。画面を見続ける生活を続けていくと、人間はもともと持っている時間的感覚を失っていくもの。それがテレビに始まり、ビデオ、DVD、パソコンやスマホに移行し、常に誰かとつながっているように錯覚してしまう。そして結局、気がついたら、人間関係が不器用になってしまう。つまり孤立死は老人ではなく、若者たちにシフトしつつあり、そこが一番の問題だということなのです」

さらに、結婚しない若者の増加も拍車をかける一因だと、吉田氏は言うのだ。

「極端な話、これからは10人中9人が結婚しない時代が来るかもしれません。するとそれがスタンダードになり、『俺、結婚するんや』と言ったら『お前、アホちゃうか!』と。冗談ではなく、このままいったら、そんな世の中が来てもおかしくない。そうなれば当然、『おひとりさま』で生活できるようなスタイルが基本になる。そんな若者が40年後、どうなっているか。間違いなく、親もなく、完全孤立無援の孤立死がどんどん増えていくはずです。つまり、今よりもっとひどい無関心社会、無責任社会がやって来るということです」

「高齢者白書」(15年版)によれば、現在65歳以上の1人暮らし高齢者は男性約139万人、女性約341万人。この少子高齢化に核家族化が拍車をかけ、昨今は遺品整理の需要が急速に高まっている。

ところが、需要の高まりと同時に急増しているのが、悪徳業者によるトラブルだという。

「例えば、清掃の際に特殊な液体を使っているとか、○○協会の認定を持っています、といった消費者を錯覚させるようなうたい文句で、高額な値段を請求する業者も現れているようです」

さらに、貴重品の紛失などの事例が後を絶たず、中には故人宅から預金通帳と印鑑を盗んで銀行から現金を引き出し、窃盗容疑で逮捕された業者もいるというから驚く。

答えは「わがままに生きる」

吉田氏はこう言って、業界事情を説明する。

「私が会社を立ち上げる以前は、遺品の多くが『ゴミ』として処理されてきました。なぜなら、うちのようなサービスがなかったからです。そういった業者は当然、遺品をゴミとしか考えないため、『片づける』行為そのものが仕事で、片づければそれでいい。ところが、今までそれを仕事にしていた業者が、声高に遺品整理をうたうようになった。で、当然のようにトラブルが頻発するようになったというわけです」

つまり、昨今のブームを受け「遺品整理」を名目に、その実態は「ゴミ収集」という業者が横行するようになったというわけだ。

「現代においても遺族の中には、ゆとりがあり、たとえ疎遠であってもまだ心の通じ合いを残す人たちは、少なくありません。そのような遺族のために作ったのが遺品整理サービスの仕事ですので、この先、身内のいない孤立していく人たちが増加すれば、私たちの需要は減っていくかもしれません。世の中が求めていないのなら、無理やり続ける必要はないし、もしかしたら時代の変化とともに、いらないサービスになっていくかもしれません」

では、孤立せずに生きるには、どうしたらいいのか。孤立死の現場を数多く見てきた吉田氏が続ける。

「離れ離れになっていたり、連絡を取らない期間が長くなると、人間関係が希薄になるもの。ただ、生き方の違いによって、そこには大きな差が生まれるものです。忘れられやすい人は、どうしても孤立しやすい。では、世間から忘れられないようにするためにはどうしたらいいのか。答えは、少しだけかわいげを残して、わがままに生きることです。年を取ると謙虚にふるまい、揉め事を起こさず周囲と仲よくやっていきたいと考えるものです。でも、それは子供と同居していたり、身内が近くで暮らしている場合には有効ですが、一人暮らしで身内がいない場合は、逆に危険になる。実は、このような方の孤立死が多い。だったら、多少わがままでも少しだけかわいげを持っていれば、若い人は意外に受け入れてくれるものです」

このような生き方をしていれば、死んだ時に遺族や周囲に自分の死をいつまでも引きずらせないで済み、お互いの精神的負担も軽くなるという。

最後に、吉田氏が考える無縁社会を加速させないための知恵とは――。

「現代は縁が大切だという気持ちはあるものの、助け合ったり協力し合うようなゆとりがない時代です。ただ、そんな世の中にあっても縁は存在するし、援助してくれる人もいる。その縁を生かしきれていないだけなんです。つまり『無縁社会』ではなく『無援社会』になってしまったということ。でも、実は縁こそが最大のチャンスなんです。だったら、それを生かしてあげる。そのためには自己中心的にならず、思いやりや譲り合いの心を持ち、将来を担う若者たちにも『縁』というものの大切さを教えてあげればいい。人は伝える立場になることで、自覚を持つことができる。ひいては、それが自分たちを孤立化させないための自己防衛にもなるということです」

今後加速するであろう〝無援社会〟で、孤立しないためには、ひとりひとりがあらためて「人の振り見て我が振りを直す」自覚を持つことに尽きるようだ。